
紅葉狩じゃあああ!!

愛華蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅葉狩じゃあああ！！

【Nコード】

N0504X

【作者名】

愛華蝶

【あらすじ】

紅葉山に現れるという鬼を退治すべく、2人の陰陽師、銀時と桂が挑む。

けど2人は術もほとんど使えない見習い陰陽師！？こんなんでホントに大丈夫？

作者誕生日記念！神楽演目、『紅葉狩』を題材にした短編です！

（前書き）

9月27日は私、愛華蝶の誕生日です！

神楽の演目だけどほとんど話ずれる（笑）

主人公は桂さんっぽい。…え？銀さん？あはは…（ごまかす）

そいじゃあいつちよいくか！！

それは遠い昔、ある村に「鬼が出る」と言われる山があった。山に
来た人々を人の姿で惑わし、喰らう…。村の人々は恐れ、その山に
近づく者はいなかった。

その山の名は…

「紅葉山」

「ヅラァーもう疲れたよ。ちょっと休憩してこうぜ」

「ヅラじゃない、桂だ。そんなすぐへばって…情けない。少しは体
力をつける」

紅葉山に登る2人の男。銀髪の天然パーマ、死んだ魚のような目の
坂田銀時と、漆黒の綺麗な長髪、少し垂れた切れ長な目の桂小太郎。
この2人、つい先日村人から「山に出る鬼を退治してほしい」と依
頼された陰陽師の端くれだった。2人の着ている陰陽師の服からも
それが伺える。

「しかし、この紅葉山は本当に美しいな」

桂は紅葉のトンネルを見て呟いた。赤、オレンジ、黄色の鮮やかな
葉が西日を浴びて美しく輝いている。

しかし…

「紅葉なんてどうでもいいよ。ヅラァ腹へったあ」

銀時は興味なし。

「貴様…」

桂は呆れてため息をつく。

「もうすぐで頂上だ。それまで我慢しろ」

「ケチィ〜」

「ケチじゃない、桂だ」

駄々をこねる銀時を引き摺って頂上にたどり着いたのは、それから
一時間後のことだった。

頂上には先ほど通ってきたトンネルよりも更に鮮やかな紅葉が散っ
ていた。その中に、ポツンと一軒の小屋があった。小屋はボロ家と
言うわけではなく、煌びやかでもない、普通の小屋だった。

「…おかしいな」

「ああ…何が？」

桂は不審そうに小屋を見つめるが、銀時は全くわかってない。

「何が？じゃないだろ！？この山は村人達から鬼が出る山として恐
れられている。そんな山に、なぜ人の気配がする小屋があるんだ？」
「！！」

人の気配：確かに小屋の中に誰がいる。それが分かれると銀時は小屋
に近寄って…。

ピンポン

「すいませーん。誰かいませんかー？」
「いや待て待て待てエエエエエエ！」

慌てて桂が銀時の口を封じる。

「こんな不審な小屋によく『ピンポーン』なんて出来るな貴様は！
少しは緊張感を持て！」

なんてやってたら…

「誰だ？」

「！！！！！」

小屋の中から人が出てきた。片目に包帯を巻いた、目つきの鋭い、
銀時達と同じ年位の青年だった。紫色の無地の着物がよく似合う。
着物と同じ紫色の髪が綺麗だった。
その青年を見た二人の第一印象は…

桂

（目つき悪…）

銀時

（背えちっさ！）

だった。

「旅のもんか？わざわざこんな山奥まで…」
「あ…ああ…まあ…」

桂は曖昧な返事を返したが、銀時は率直に聞いた。

「お前は何でこんな鬼が出る山なんかにいるんだ？」

「鬼…？」

「ばっ…銀時っ！！」

こんな人が寄り付かない山の中にいるということは、この青年が鬼である可能性が高い。

「鬼か…ククツ。確かにこの山には鬼がいると言われている。が、そんなモンはただの迷信だ」

「迷信…？」

「大方この山に住んでる俺を見て、誰かが鬼だと見間違えたんじゃないか？」

確かに、今までもこんな事はあった。幽霊を見たあの、化け物がいたあの…。だがそのほとんどが何かの見間違いだった。もしかして今回も…？

「ンだただの見間違いかよ。わざわざこんなところまで来て無駄骨か？」

「悪い事しちゃったな。詫びに茶でも飲んでいけよ」

高杉と名乗るその青年に小屋の中に案内され、居間に通される。

「飲めよ」

「……………」

「心配すんな。毒なんざ入っちゃいねーよ」

明らかに警戒心むき出しの桂は、目の前に出された麦茶を睨みつけていた。

「…申し訳ないが、見ず知らずの者に物をもらつ性分ではないので…」

「ほお…そうか…。だが相棒はそうじゃないようだな」

高杉がチラッと桂の隣を見ると、銀時はすでに出されたお茶を飲んでいた。

「……………ッのバカが……………」

桂はもう半分ヤケクソで、お茶を飲み干した。

「で？お前らはさっき言つてた鬼とやらを退治しに来た陰陽師ってワケか？」

2人の服装を見て高杉が言う。

「陰陽師と言つても、まだ術もまともに使えない見習いだ。術が使えないかわりに、剣術だけは自信がある」

「その自慢の剣術で鬼を退治しようつてか。難儀な話だな」

ククツと笑う高杉は、まるで子供のようだった。

（こんな奴でもあんな表情をするのか…）

「で？お前は何でこんなトコに1人で住んでんだ？見たところ今までに人が来た形跡もねえし」

銀時が高杉に質問をする。お茶はすでになくなっていた。

「…ここは落ち着くんだ」

高杉が縁側に舞う紅葉を見て呟く。

「落ち着く…？」

「ああ。里で住むよりも、山の中の方が落ち着くんだ。特に秋はな」
「確かに、この山は紅葉狩りには持って来いな場所かもな」

桂も縁側を見つめる。開いた襖から見える紅葉は一枚の風景画のようだった。

「鬼退治とはいかないが、紅葉狩りをして帰るのも悪くないな」
「ったく葉っぱなんか見て何が楽しいんだよ。どうせなら食える紅葉がいいよね。あゝもみじまんじゅう食いてえ」

銀時はうだうだしながらそう言った。コイツには感性と言う物が無いのだろうか。

「安心しろ。少なくとも紅葉狩りだけで帰そうとは思っちゃいねーよ。…いや、」

「帰そうとも思っちゃいねーよ」

「それはどういつ…」

ドクンッ

「つく…!!」

「うぁっ…!!」

突然銀時と桂が胸を押さえてうずくまった。その様子を高杉は面白そうに見下ろしていた。

「やっと効き始めたか…。どうだ？薬の味は」

「…ッ高杉…貴様…」

「安心しろ。死ぬほどは入れちゃいねえ。毒なんかで殺してもつまんねえからな」

高杉は笑っていた。その笑いは、先程の子供のような笑いではなく、妖しい鬼のような笑いだった。

「じつくり、痛めつけてやるよ…」

「やはり…貴様が…この山に住む…鬼…」

「気づくのが遅かったな…。さて、何がいいか…刃物か、それとも

紐か…」

そう言うと、高杉は他の部屋に行ってしまった。

「…つくそ…身体が動かん…。オイ銀時…大丈夫か…？」

「ああ…意識が飛びそう…俺は最初っから怪しいと思ってたぜ…
アイツは…」

「嘘を…つけ」

言いながら、2人とも意識が朦朧としていた。呼吸もままならない。

「……銀…とき…」

桂が意識を手放しそうになった、その時。

「大丈夫ですか？2人とも」

急に息が軽くなったと思ったら、目の前に1人の男がいた。

「あ…貴方は…！！」

長く薄い色の髪。柔らかく微笑む顔。2人の師匠であり、最強の陰陽師…吉田松陽だった。

「先生…どうして」

桂が聞こうとすると、松陽が桂の頭を撫でる。

「少々心配でしたからね。案の定来てみればこのさま。まだまだ修行が足りませんね」

松陽の言葉に、2人の顔が赤くなる。すると、松陽は2人に一枚ずつ呪符を渡してきた。

「これは…？」

「式神です。貴方達は初めてなので初心者向けのを渡しておきます。あの鬼を退治するのは貴方達ですよ」

「…はいっ！」

2人に決意が芽生える。（やっとな？）

高杉が部屋に戻ると、2人の姿がなくなっていた。

「…………逃げたか？」

不審に思っ て辺りを見渡していると、突然後ろに人の気配をとらえた。

「……………！！！」

ガキイイイイン！！

火花が散り、刀がぶつかり合う。

「生きてやがったか」

高杉の目の前にいるのは、長髪の陰陽師、桂だった。

「1人か？あ的那天はどうした？」

「心配するな。死んでもいないし、逃げてもない」

桂がそう言った時、高杉の後ろに銀時が現れ、高杉に刀を振り下ろす。しかしいち早くその事に気づいた高杉は、身体をひねり、桂を弾き飛ばして銀時の方向に投げ飛ばした。その衝撃で高杉の刀が桂の頬を掠める。

投げ飛ばされた桂が銀時とぶつかる。

「バカヅラ！！邪魔だ！！」

「ヅラじゃない桂だ！！」

やっとの事で立ち上がると、2人は高杉に向き直る。高杉は刀に付いた血を舐めながら妖しく笑う。

「…まあ何の抵抗もしねえ奴を殺してもつまんねえよな」

2人は顔を見合わせて先ほど松陽から貰った式神を取り出す。

『その式神は貴方達のイメージで実体化します。頭でイメージを作つて、術を唱えるんです』

松陽の言うとおり、イメージを作った2人は術を唱えた。

「これより、式神の解放を許可する！！急急如律令！！いでよ式神！！」

術を唱え終わると、呪符から煙が出て2人を包み込む。

「チツ、煙てえ」

煙が晴れると、桂と銀時の前に式神が…。

「オイヅラ。何だそれ」

「貴様こそ何だそれは」

桂の前に現れた式神は、白い体に黄色いくちばしのついた謎の生物。

「なにそのオ　Ｑ的な生物。ふざけてんのお前」

「何が不満なんだ？可愛いではないか」

「そういうことを言ってるんじゃないやねーよ！！」

「文句の多い奴だ。貴様こそ、何なんだそれは」

そう言つて桂が指さしたのは、黒い着物を着た頭に何か角が生えた少女。

「外道丸でござんす」

少女が自己紹介する。

「いや、原作でも使ったし、楽かな〜と思つて」

「馬鹿か貴様は。そんな子供を出しても意味が無…」

桂が言い終わる前に外道丸の金棒が桂の足下に落とされる。

「あつしをなめてもらったら困るでござんす」

無感情な目で桂を見つめる外道丸。

「それに、手っ取り早く片付けないとやられるでござんすよ」

外道丸が言った途端、高杉が桂に襲いかかる。

「無視してんじゃねえよ。こっちに集中しな」

桂が、斬られると思った瞬間、白い謎の生物が高杉の刀を受け止める。

「おおっ！すごいぞエリザベス！！立派な真剣白刃取りだ！！」

「何その生物エリザベスって言うの？」

「邪魔くせえ」

高杉はすぐに体勢を立て直し、エリザベスの白い胴体を横に真っ二つに切り裂いた。

「エリザベスうう！！」

「呆気なさすぎ！！何のために出てきたんだアイツ！！」

体を裂かれたエリザベスはそのまま綺麗さっぱり消えてなくなった。

「あんな式神じゃあまともに戦えないでござんす」

そう言った外道丸は、金棒を持って高杉の懷に飛び込んだ。

「一気に総攻撃でござんす」

「ねえ。何でさっきから式神が全部仕切ってんの？俺ら式神以下？」

「ぐだぐだ言っている場合か！！」

銀時の横に立つ桂はなぜか涙目。

「エリザベスの仇！！」

「いや目的違う！！」

そこから陰陽師と式神の猛攻撃が始まる。

人数差ではこちらの方が有利なのに、相手に全く歯が立たない。流石鬼といったところだろうか。

「うっ！！」

「銀時！！」

銀時が庭に投げ出された。倒れている銀時の肩に高杉が刀を突き立てる。

「ぐあああああ！！」

山全体に響く銀時の悲鳴。舞い散る紅葉の赤と血の色が混じる。

「まずは1人」

刀を刺したまま高杉は銀時の刀を拾い上げる。

「次はテメエだ」

「高杉：貴様は何故こんな事をする。人を殺して何が楽しい？」

桂が聞くと、高杉の動きが止まる。しかし止まったのはほんの数秒で、すぐに戦闘態勢に入る。

「俺が鬼だからだ。それ以外に何がある」

それだけ言うと、高杉は桂ではなく外道丸に刀を突き立てる。

「式神は邪魔だ」

「外道丸！！」

桂は倒れた外道丸を抱きかかえた。

「…銀時様：力になりたかった…」
「いや、なんかクーム的な事言うのやめようか。切なくなってくる」

か細い声で外道丸が呟いた。

「彼は、鬼なんかじゃない」

「え？」

それだけ言い残すと、外道丸は霧を纏って消えてしまった。

「いやどこまで　ローム気取り！？どんだけリボー　好きなんだ貴様！！」

突っ込みまくる桂を冷たい視線で見つめる高杉。

「あの天パと仲良く逝かせてやるよ」

そう言つて桂に刀を…

「ちがう」

高杉の手が止まる。

「貴様は鬼なんかじゃない」

「何を言つてやがる。俺は鬼だ。それ以外の何者でもねえ」

「鬼だつたら、この紅葉山を住処になんかしない。この綺麗な自然を『綺麗』なんて言わない」

振り返つた桂の顔は涙で濡れていた。その涙は先程までのエリザベスに対しての涙ではなく、高杉に対しての悲しみの涙だつた。

「さつき、外道丸が消える間際に言った。『彼は鬼なんかじゃない』と。貴様はただの…普通の人間なんじゃないのか？」

「違う…俺は」

前に聞いたことがある。この下の里では昔、男の子を山の神に生贄として差し出したことがあるらしい。

「その子供の名が…高杉晋助」

高杉は黙つたまま、刀を桂に向けた。

「ずっとこの山で1人で生きてきた…」

「黙れ」

「里の人間がこの山に来た。そしてお前を見てあの時の生贄だとす

ぐ分かった」

「黙れ…」

「それを知った里の人たちはお前を殺そうとした。その左目もその時の…」

「黙れえ!!」

高杉の怒声で桂の言葉が止まる。

「…そうだよ。全部デメエが言ったとおりだ」

高杉がぼつりぼつりと話し出す。

「俺は里の人間から見捨てられたんだ…。作物が育たなくなつて、身よりのない俺を生贄として捧げた。そんなんで、里がよくなるわけがねえって分かってたのに…」

高杉の、包帯をしていない右目から涙が溢れた。

「…辛かったんだな」

桂は高杉をそつと抱きしめた。まるで、お母さんが子供をなだめるように。優しく。

「俺たちと来ればいい。一緒に陰陽師になればいい」

「陰…陽師…」

高杉が桂の言葉を繰り返す。

「お前はもう、1人じゃない。俺たちがお前の家族だ」

高杉が今まで得られなかったもの。人の温もり。優しさ。

初めて、迎えられた。

『もう、1人じゃない』

「あのさあ、肩刺された人ほつといて勝手に話進めないでくれる？
ホントお前等マイペースなのな」

肩に包帯を巻いた銀時が、山を下りながらブツブツ文句を言う。

「だからすまなかったと言っているだろう。いつまで引きずるつもりだ」

先を歩く銀時と桂を見ながら、呆れている高杉。一緒に山を下りながら、紅葉のトンネルを見上げる。

「…ありがとう」

そしてさようなら。

青年は 笑っていた。

（後書き）

陰陽師に迎えられた高杉のその後：

高杉「臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前」

松陽「飲み込みが早いですね」

桂「犀星、螢惑星、鎮星、太白星、辰星の五帝、我を助け、けがれを被い清めたまえ」

松陽「小太郎もだいぶ上達してきましたね」

銀時「バルス！！」

全員「いや、それ滅びの呪文！！」

ちなみに桂が唱えてた呪文の読み方は以下の通りです。

犀星
さいせい

螢惑星
けいわくせい

鎮星
ちんせい

太白星
たいはくせい

辰星の五帝
しんせいのごてい

被い(はらい)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0504x/>

紅葉狩じゃあああ!!

2011年10月9日16時02分発行